



Title	健康概念の起源について : 古代ギリシャ世界における身体と生命 III. 祭典の思想と生存の意志
Author(s)	河口, 明人; Kawaguchi, Akito
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 112, 1-26
Issue Date	2011-06-30
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.112.1">https://doi.org/10.14943/b.edu.112.1</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/46783">https://hdl.handle.net/2115/46783</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	Kawaguchi.pdf



# 健康概念の起源について

—— 古代ギリシャ世界における身体と生命 ——

## Ⅲ. 祭典の思想と生存の意志

河 口 明 人\*

### Origin of Health Concept

Soma and Psyche in Ancient Greece

Akito KAWAGUCHI

【要旨】文化は「遊び」の中から発生し、日常を超えた「遊び」は自由な創造性の根源であり、文明の駆動力である。ギリシャ社会が獲得した宗教的生活の核心的象徴である祭典は、互いに死力を尽くす戦闘状態にあったポリス間の一切の戦闘を禁止するという驚くべき秩序を保って継続された。それは、宣戦布告もない不断の戦闘状態に晒される精神的緊張と抑圧からの解放であるとともに、アゴン（競争）によって、常に他者を凌駕しようと意欲したギリシャ人の善と美を創造する身体への憧憬の源泉でもあった。祭典がテストしたのは、人間の境界を越え行く精神と身体が一体化したアレテー（卓越性）である。ポリスの命運に自由な生存を託し、最善を尽くさんとする不滅の行動原理を堅持したギリシャ人は、感性に支えられた生存の意思（生き甲斐）によって生命を意義づけた歴史的民族であった。

【キーワード】遊び・祭典・アゴン・アレテー・生き甲斐

#### 【目次】

#### 1. 闘技（アゴン）文化と祭典の思想

(1) 「遊び」の哲学, (2) 祭典の思想, (3) 闘技（アゴン）文化の諸相

#### 2. ギリシャ精神における生

(1) 人生の価値, (2) ポリス精神の崩壊, (3) 健康と生存の意志

---

\* 北海道大学・大学院教育学研究院・人間発達科学分野・健康科学（教授）

## 1. 闘技（アゴン）文化と祭典の思想

### (1) 「遊び」の哲学

「遊びは文化よりも古い。」<sup>(1)</sup> この簡潔なライトモチーフで始まるホイジンガの「ホモ・ルーデンス」は、遊びが人間の文化を創るという基本的認識に貫かれた生物学的人間論である。「競争とか誇示ということは、慰みごと、楽しみごととして文化のなかから発達してくるのではない。むしろ文化に先んじているのである。」<sup>(2)</sup> すなわち文化や文明は、大脳機能が可能にする人間的な「遊び」の結果と考えられる。ホイジンガは言う。「動物は遊ぶことができる。だからこそ、動物はもはや単なるメカニズム以上の存在である。」<sup>(3)</sup> 人間の脳機能でさえ、現象的には、物質的メカニズムで動いている。物質的メカニズムの連鎖反応には、因果関係が厳然として存在し、結果はそれに先行する条件によって決定される筈である。先行条件によってのみ演繹される結果は、それまでの「人間」の地平を超えることは不可能である。しかし、そうであるならば、何故人間の発達や歴史や文化の発展が可能なのであろうか？人間の動きが、物質的メカニズムによって中枢神経を機能させ、その機能が物質的メカニズムに依存しているにもかかわらず、物質的メカニズムそのものによっては説明できない心的現象を介して「意味」を構成し、それに触発される新たな行動として結実するとき、その行動は新たな現実を産む。そしてその行動がこれまでの世界では、あるいは人間の関与なしには説明できない変化をもたらすとき、そこには先行する条件によって決定される結果を超える創造的な質的変化があらねばならない。無からの創造はないとすれば、その止揚（aufheben）を保証するのは一体何か？一切の人間の創造性は、脳機能に依存し、その脳機能は動物的な生存の可能性を追求する途上に発揮される人間的「動き」の原因であり、また結果であるが、その創造を可能にするものは、動きによって内在化され、記憶された現実の絶えざるイメージの再構成によって醸成されてくるものである。想像的再構成は、再構成である限り、先行する「認識」による因果律という規律の基に構成される。しかし、すでにイメージそのものが、イメージを可能にした現実からは乖離した一つの現象である。さらに重畳するイメージは、単なる断片化されたイメージの重ね合わせではない。断片化されたイメージの重ね合わせが、人間の中枢神経の回路で融合され統合され、具体的な現実を超える新たな一つのイメージとして幻視されるとき、それは人間の中枢にのみ存在する新たなイメージである。そしてイメージが観念を産み、その観念が行動を契機として現実化されるとき、その現実は創造以外のなにもものでもない。遊びは、この幻視され想像されたイメージを秩序づけることによって発揮される人間の文化的能力の発現である。

「遊びは遊び以外の何物かのために行われる。」<sup>(4)</sup> 「遊びという概念は、…それ以外のあらゆる思考形式とはつねに無関係で」あり、生活そのものからも遊離した「絶対的自立性」をもつ。絶対的自立性は、排他的であり、日常を超越している。したがって、それは日常から遮断され、切り離され、日常とは無関係の遊びの行為自体を目的とした規範の中のカオスであり、一定の条件の中で、すべてが試され、また許される。このために、遊びは幻視された創造の契機を宿し、創造性の探索を孕む。なぜならば、幻視することで自ら”現実”を再構成し、その結果や報酬の如何にかかわらず反復する過程に内在しているのは、目的を特定しないために許される「自由性」、すなわち創造の根源たる混沌の中の「自由性」である。遊びの際だった特徴は、それが自由な行動であり、非日常であり、生存に直接的に関係する

本能的欲望を遙かに超えているということである。したがって遊びは決して人間だけに限定されたものではない。鳥が異性を求めるときの様々な求愛行動も、犬がじゃれ合う行動も遊びの範疇に入るだろう。

「すべての遊びは…自由な行動である。命令されてする遊び，そんなものはもう遊びではない。」<sup>(5)</sup>「遊び」は、「本気でないもの」とか「いい加減なもの」を意味しない。遊びの本源的な人間の自由さが発揮されなければ，人間の文化は不可能だった。したがって文明も不可能である。「文化は遊びの形式の中に成立した…文化は原初から遊ばれるものであった。」<sup>(6)</sup>しかも，遊びは余暇を使って行われる「余剰の行動」ではない。遊びのスペクトルは広大といえども，遊びは繰り返され，洗練されればされるほど真剣に行われる傾向があり，ときとして生命を賭して本気で行われることがある。遊びは，人間の全方向の脳を試す。身体的競技（スポーツ）として，悲劇として，詩として，あるいは音楽として…。その広大なスペクトルの中で，人間的な柔軟性と堅牢性として，社会の組織化とともに文化は醸成される。個的な人間のみでは言葉が発生しないように，文化も成長しない。すなわち，「文化は遊びとして，始まるものでもなく，遊びから始まるものでもない。遊びのなかに始まるのだ。（傍点原文）」<sup>(7)</sup>

ホイジンガは遊びの要素を列挙する。①余暇に行く自由な行動であること，②物質的利害という直接的欲望からは離れた非日常的行動であること，③限定された時空間で完結し，反復可能であること，そして④固有の秩序の中での美的形式の追求であること，である。遊びは理性的な所作でもなく，理性を利用することはあっても，その本源的なものは理性から演繹されるものではない。理性の目的は，生存にある。遊びは生存を課題としない。人間は，あらゆる形で遊びと連結されている。「遊びの基礎因子は個人の遊びの場合にも，団体の遊びの場合にも，闘うこと，演技すること，見せびらかすこと，挑みかかること，誇示すること，それを本当に『しているかのように』<sup>いつわ</sup>伴ることなどである。」<sup>(8)</sup>人間が<sup>いつわ</sup>伴るのは，現実をすでに超克せんとしているからである。なぜならば，すべてを包含する「現実」そのものを偽ることなどはできない。誤解をおそれずにいえば，伴ることができるのは，まさに創造力に由来する。

「人間は子供のうちは楽しみのために遊び，真面目な人生の中にたてば，休養，レクリエーションのために遊ぶ。しかし，それよりもっと高いところで遊ぶこともできる。それが，美と神聖の遊びである。」<sup>(9)</sup>「未開人は，存在と遊びとを区別できない。つまりその存在であることと，その存在を演ずることに間に何ら概念上の差別を知らない。」<sup>(10)</sup>それは，自分が演じているものと，自分という存在との間には何らの対応関係や境のない，いわば「神秘的統一」が体現されているからである。私たちもなお，この人間の脳機能，生殺与奪の生存のぎりぎりの領域だけに用いることは出来ないだろうし，よしんば出来るとしても，それに耐えることは出来ないだろう。今日でもあらゆる祭祀や祭りは「非日常」なものとして存在している。人々は生活時間をかえ，職場を離れ，仕事を忘れ，必要以上に群がり騒ぐ。歓喜や熱気，そして狂喜乱舞が，祭りとして許容され，ときとして死亡する人間さえいるのである。だからといって，その祭りが非難され，断絶することはなく，翌年も，またその次の年も続けられ，この繰り返される祭りを瞬間的に断ち切る力は共同体にも，社会にもない。「遊びと祭式の根源的な同一性」<sup>(11)</sup>に気づけば，「何故遊ぶか，というように 謬った 問い（傍点引用者）」<sup>(11)</sup>をすることは無いだろう。なぜなら，「人間に先天的に 与えられている 機能，

それが遊びなのだ。(傍点引用者)」<sup>(12)</sup>したがって遊びとは、創造力の重要な表現形なのである。今日のあらゆる科学も遊びを内包している。自由性とは、遊びという文化的能力が醸成する創造性である。

遊びの時間は、価値のない時間なのではない。現代において「なかば恥ずべきものとなってしまった遊びや娯楽は、…ひとつの社会が、その集合体として結束を締め直し、一体感を確たるものとして感じるために行使する主要手段の一つを構成していた。」<sup>(13)</sup>労働時間に価値をおく経済政治思想は、近現代における最も強力な"幻想"であり、さまざまな局面で私たちを規制している。しかし依然として存在する、「労働を現実的なもの、余暇を非現実的なものとして評価することは、労働がもっとも高い価値のひとつになり、一方、余暇がしばしば無用な縁飾りとして扱われるような社会の伝統や価値観と密接な関係がある。」<sup>(14)</sup>換言すれば、私たちの日常を構成する非日常の「遊び」は、不可欠の人間の価値をもつものとして、逆に労働時間を規制せずにはおこななかった。生産性とは労働時間そのものに比例したのではなく、労働時間内に発揮されるが、それは余暇を含めた生命時間が蓄える全人的能力に依存している。現代人が、スポーツを「精神よりは肉体を使い、経済的には無価値のとりたりにない、快楽中心の余暇活動」<sup>(15)</sup>であると考えているならば、それは重大な誤解である。ソクラテスが劇的に過ったように、そもそも精神は肉体の所産なのである。

自由な遊びは、しかし自らを秩序で縛る。「遊びは秩序そのものである。…秩序の違犯は遊びをぶちこわし、遊びからその性格を奪い去って無価値なものにしてしまう。」<sup>(16)</sup>にもかかわらず、遊びは壊すことができる。それは決して容認されないが、積木を積みたてた子どもが一挙にしてそれを瓦解させるように、「遊び破り (spoil sport)」が可能であり、したがってそれは、二度と後戻りも反復もない日常性—あるいは人生—と異なり、再び始めることが可能であることを図らずも前提にしているのである。それは社会を傷つけることなく、「規範と戯れる」ことを可能にする。しかし、それゆえに規範や規律は精度を増すだろう。それにしたがって反復される遊びは、緊張の度を増すだろう。「この反復の可能性は、遊びの最も本質的な特性の一つである。(傍点原文)」<sup>(17)</sup>しかして、この反復とは同じことが繰り返すことを意味しない。反復される遊びはすでに元の遊びではない。公正や論理、条項や原理を前提とする固有の規律ないし秩序という合理的思考体系の中で行われる美的形式の追究は、完璧性を目指す精神を試すものとなる。この精神の試行に緊張が生まれ、「この緊張の中で、遊ぶ人の各種のさまざまな能力が試練にかけられるのだ。それは彼の体力、不撓不屈の気力、才気、勇猛心、持久力などの試練となる。」<sup>(18)</sup>その試練を乗り越える過程で、人間はあらたな世界(遊び)を再び幻視するのである。

## (2) 祭典の思想

今日の私たちの意識にとって、人生の大半は日常である。このことはギリシャ人とて大差はなかったかもしれない。しかしこの日常の基盤は何であったか? パッハオーフェンという。「すべての文明にとって唯一にして強大な原動力となるものは宗教をにおいて他にない。人間存在の浮き沈みはすべて、この至高の領域に発する運動の帰結なのである。宗教抜きには古代の生活のいかなる側面も理解できず、とりわけ原初の時代などは見通しがたい謎となってしまう。この時代の人々は徹底して信仰に支配されており、すべての生活形態やすべての歴史伝承を祭祀の根本思想に結び付け、すべてのことがらを宗教に照らしてのみ見、そ

の神々の世界と自らを完全に一体化していた。」<sup>(19)</sup> ギリシャ時代を遡れば遡る程、この傾向は強まると考えられる。古代人が世界を理解する際の秩序の根源は、おしなべて人間の想像であるところの「神」である。神に秩序の再現を希う人間による儀式は、まさに「遊び」の形式を帯びながら世界の秩序を、すなわち無為意識的な自己の想像による秩序を確認するのである。この秩序は原始的ではあっても、彼らのアイデンティティとなり、共同社会の存立基盤そのものとなる。「祭式的な遊びによって未開社会は統治制度の最も初期の形式を獲得する。」<sup>(20)</sup> 古代社会の「宗教的」祭祀として共通し、また必須であるのは、彼ら自身の生存そのものに結びついていたこの精神性にほかならない。すなわちそれは、人間自身の再生産を司る子を産む母親と、食物を産む大地への崇高な信仰である。ギリシャ世界におけるデメテル信仰は、その表現である。人間社会のこの根源性は、初めにあったのは日常ではなく、この宗教的生存観とそれを軸とした生活であったことを知らしめる。簡明に表現すれば、日常の中に祭祀が設けられたのではなく、先行する祭祀を軸とした生活形態が文明化とともに次第に祭祀を限定的なものにしたのである。この意味で「祭祀の観念が根源的なものであり、日常的な生活形態はその帰結であり、その表現なのである。」<sup>(21)</sup> ギリシャ世界の男性性は、その文明の特徴であるとしても、その父権制は、乱婚制から母権制を辿った歴史的社会経過を前提としているのであり、この祭祀の根源的な思想や観念と無媒介であったわけはなく、またその根源性から離れて存続することもあり得なかった。

人間が集団的に競い合う最も残酷で窮極的な現象は戦争である。国家権力に象徴されるように、暴力の集中と独占、あるいはその抑制は社会を安定させる。しかし一方で、闘いに晒された民族は、闘いのエトス (ethos) を再生産し、存続させる機構を生み出す必要があった。したがってそのエトスは本質的に男性的である。ギリシャポリスの存立の構造が戦士共同体であったことと同様に、女子のみが参加できたヘライア祭を除いて、すべての祭典は男性だけが参加でき、女性は排除されていた。祭儀の基にある思想は神々である。祭典には供犠や行列、踊り、競技という複数の捧げものが催されたが、各々のポリスは独自の神々とそれを祝う祭典をもち、各種楽器の協奏、詩歌の暗唱や運動競技を含む地方祭を開催した。このうち、次第に広範な人々をひきつけていったのは、ゼウスを祝ったオリンピア祭とネメア祭、アポロンを祝ったピュティア (デルフォイ) 祭、そしてポセイドンを祝ったイストミア祭であった。これらの祭典は、ことごとく神々の祭祀であったのであり、その神々の前で、競技が捧げられたのである。

殺戮という残酷さの中にも、戦争がもたらす武器としての身体機能の認識は、それが産み出す様々な技能の開発を通して人間の価値を高めたはずである。ポリスの勝利は、到達しうる身体的能力の開発に支えられる。ヘラスという厳密な等質のアイデンティティを前提としたギリシャの祭典において、競技はさらに異なる個々のポリスのアイデンティティを活性化させる。この活性化は多彩である。勝利の喜び、敗北の恐怖や悲しみ、失望、自分のポリスへの愛情や愛着、相手に対する憎しみや怒り、嫌悪など、身体の創造と人間的感性の鍛錬の動機を孕みつつ、ギリシャ人は人間的能力の高めあいを神への祝祭として平和裡に実践した。その特徴は、根源的である非日常的な時空間の保障、方法 (ルール) の開発と公正の精神、そして殺戮の回避ないし暴力の規制である。

祭典を支えた最も特徴的な基本思想は、ホイジンガのいう非日常性と秩序、とくにギリシャ人にとっていわば日常であった戦争行為の休止による祭典のための時間と空間の保障

である。「この制度は、エリスのイピトス、ピサのクレオステネス、スパルタのリュクルゴスの3人の王の間の聖の結果定められたものであった」<sup>(22)</sup>という。この全ポリスに適用された祭典のための時間調節の制度は極めて高度であった。オリンピア祭の期間中は、たとえ交戦中のポリス間であっても休戦となった。さらに、「エリス（オリンピアの地方名）は、神ゼウスの一聖地である。敢えて武力で押し入ろうとするものは、冒瀆者として焼き印を押される。この冒瀆行為を力づくで罰しないものも、同じく罪がある」<sup>(23)</sup>とされ、オリンピア祭への武器の携行は禁止されていた。非ギリシャ勢との戦いであったペルシャ戦争の真只中においても、祭典が中止されることはなかった。7月下旬から8月下旬の間に主にエリスで開催されたオリンピア祭は、日程が決まると、「停戦を運ぶ人」（スポンドフォロイ）がギリシャ世界に向かって送り出された。停戦は3ヶ月まで延長され「大会に参加する国は武器をとってはならず、訴訟を起こしてはならず、死刑を執行してもいけなかった。」<sup>(24)</sup> オリンピア祭の開催時期は、麦の刈り入れが終わる農閑期であり、夏至のあとの満月の時期にあっていた。ペロポネソス戦争の27年をみても、オリンピア祭だけでもすくなくとも6回は開催されたことになる。ギリシャ人もまた、近代の戦争が、宣戦布告によって開始されたように、互いの関係が、戦闘状態か平和的狀況かを区別した。「休戦中は、戦闘行為が休止されることはもちろん、死刑判決の延期など、社会不穏をもたらすあらゆる要素が遠ざけられ、僭主を始めとする参加者がポリスからポリスへと自由に往来することが可能になった。」<sup>(25)</sup> 戦闘状態のポリスが、オリンピア祭休戦といういわば国際法規を遵守する様は、違反行為とその罰則によって知ることができる。BC420年頃、スパルタはオリンピア祭のための休戦が宣言された後、1,000名に及ぶ武装兵を送って、近隣のビルコン要塞を攻撃し、この平和の休戦を破った。スパルタは休戦の公告が届いていなかったと弁明したが、そのオリンピア祭（第90回）からは締めだされ、莫大な罰金を支払わなければならなかった。<sup>(26)</sup>あるいは後のマケドニアのフィリップは、「アテナイ市民がオリュンピアの途上で彼の傭兵の何人かに略奪されたという理由で、陳謝し、それに罰金まで支払わなければならなかった。」<sup>(27)</sup>

互いに侵略し合うポリスが、なぜ祭典の最中には停戦しなければならなかったのであろうか？停戦は規則的に、極めて高度な驚くべき節度をもって堅持されたのである。これは、ギリシャ人にとって、なぜ祭典が、とくにオリンピア祭が必要であったかという意味と等価である。これらの制度は、多くのポリスの絶対的な支持がなければ貫徹されるものではなかった。しかし互いに敵対し合うポリスが、互いに停戦を支持する構造とは何か？ギリシャ人は世界を可能にしている秩序をオリュンポスの神々に見ていた。争いがあったとしても、その争いは、生存の否定という思想に起因しているものではなく、ましてや世界の存立を意義づける「共通」の神々を凌駕するものではなかった。彼らはむしろ、共通の神々に基づく世界秩序の中で、互いに闘いによって競い合う相手として認め合っていた。同時に、対立するポリスと戦闘状態にあったギリシャ人にとって、したがって生命を賭する戦いの間断のない予兆の中で、ギリシャ人はその精神的圧迫と抑圧から、自らを解放させる時間が必要だったように思われる。その非日常の自由な時間は、かれらの張り詰めた生活の緊張を解きほぐし、それがすべてのポリスの人間に共通であったからこそ、休戦協定は支持され、しかも戦闘に用いる身体能力の開発にける努力を競いあい、その到達点を確認し合うことは、美の追求としての文化的能力、則ち「遊び」であったと思われる。それは、神々に連なる人間としてのアイデンティティを与え、共通の身体能力の開発を目指すヘラス人のアイデンティティを

呼び覚まし、かつ確認させたと思われる。未開民族の多くに見られる類似した成人式の儀式においても「日常の法律、掟から解き放たれるのは彼ら新参者（＝成人になる者：引用者）ばかりではない。その間全部族のいっさいの争いごとが休戦となる。すべての報復行為も一時的に停止される。」<sup>(28)</sup> 現代でもなおその痕跡を有するの祭事における日常の停止は、私たちが依然として堅持している古代からの歴史的遺産である。「重大な戦い、危険、冒険、束縛をとまなう日常生活の緊張や抑圧を相殺することによって、いわば感情を活性化してくれる社会制度のない社会などはほとんどない。」<sup>(29)</sup> しかも競技「(スポーツ)の驚くべき多様性は人間に広い選択を許容する。…余暇活動のいくつは、勝利や喜びばかりでなく、恐怖と悲しみを、愛着や愛情ばかりでなく、憎しみを模倣的に喚起する。…それは非余暇的活動における人々の全般的な抑制の重荷を軽減するのである。」<sup>(30)</sup>

戦闘状態にあったギリシャポリス世界の均衡は、それぞれのポリスの合従連衡によって支えられていた。そのことによって互いに生存の確率と安全性を高めた背後には、高度な自己抑制の機転が基盤に存在していなければならなかったものであり、それを解除し、非日常的に精神を高揚させる祭典がどうしても必要だったのである。したがって、祭典の秩序は厳格であらねばならなかった。

祭典の重要な特徴の一つは、競技内における厳正なる秩序、すなわち公正である。「遊びは秩序そのものである」というホイジンガの言葉のように、紫の衣をまとったエリスの審判は「ヘラノディカイ（ヘラス地方の審判者）」とよばれ、公正なる秩序を維持するため極めて強力な権限をもっていた。かれらは祭典の1年前に選挙され、10ヶ月間最高裁判所（Nomophylakes）に住み込んで競技に関する知識を教わった。競技参加者の名が送られてくると、ヘラノディカイはその参加資格、すなわちギリシャ人であるか否か、聖なる休戦の侵犯者ではないか、訴追の対象者ではないか、などを厳密に調査し、判定した。賄賂行為や休戦侵犯行為は、参加資格を剥奪するほど厳格だった。それほどまでに厳格な秩序を維持しようとしたオリンピア祭は、単なる競技ではなく、神々の信仰に支えられた権威を保持した祭祀に違いなかった。ヘラノディカイは優勝者に対してシュロの小枝（オリンピア祭）やオリーブの樹（オリンピア祭）、松（イストミア祭）、月桂冠やセリ（ネメア祭）を預けたが、競技における暴力の規制も重要な仕事であった。彼らは、競技者や観衆の興奮と暴力を規制するために、鞭もちや棍棒持ちを雇用しなければならなかった。したがって、ヘラノディカイは、単に競技の勝者に軍配を挙げたばかりではなく、かれらはヘラス地方の正義や公正を体現する人々であらねばならなかったのである。

祭典がテストしたのは全人的なアレーテである。オリンピア祭を初めとするギリシャの祭典は、すでに文明化した時代の祭祀であったが、文化の根源たる遊びとしての名残を色濃く帯びたものだった。オリンピア祭やパン・アテナイ祭に参加できる競技者は、「本国で最低10ヶ月のトレーニングを積んでいることが要求され」<sup>(31)</sup>、そのための高価な教育者・指導者を必要としたために、裕福な家庭の青年か壮年男子に限られていた。「オリンピウ・チャンピオンでさえもトレーニング中に死亡していることは訓練中のトレーニングがいかに厳しい、ものであったかを示唆している。」<sup>(32)</sup> どのポリスにも体育場（ギムナシオン）のちにプラトンやアリストテレスの学園となるアカデメイアもリュケイオンも、もともとギムナシオンであった一があり、そこで若者達は主に身体を訓練したが、余暇（スコール）を利用して集うギムナシオンはまた、音楽や会話によっても若者を育てる教育現場であった。

身体的競技は、競技者の全員が一切を纏わない裸身での競技であり、戦車競争の御者も同様であった。何の付属物も許容しない身体への公明性は、その柔軟でしなやかな動きから生み出される驚くべき能力を意識させたに違いない。同時にそれは、戦争を標的にした身体的能力の開発の意味を帯びていた。円盤投げも槍投げも、投石や槍投げという戦闘形式における能力の鍛錬であった。戦争時における白兵戦を想起させるものとしての格闘技がある。その種類は、レスリングとパンクラチオン（総合格闘技）、そしてボクシングである。「古代では、ボクシングやレスリングのような『激しい』競技種目の通常のルールは、…はるかに高い度合いの肉体的暴力を認めていた。」<sup>(33)</sup>「殺されたり、重症を負ったり、あるいはおそらく生涯、不具になったりするようなことがあっても、それはパンクラシオンの戦士が負わなければならないリスクであった。」<sup>(34)</sup>「このようなボクシングの試合の戦闘基質は、…むしろ戦士である貴族階級の戦闘基質から直接、派生したものであった。」<sup>(35)</sup>「戦士達は互いの目をくり抜くことが許され…男達がしばしば殺されたことはいうまでもない」。<sup>(36)</sup>しかし「生存者－殺人者－が罰せられもせず、汚名を着せられることもなかった。」<sup>(37)</sup>

戦闘における兵士の働きは、当事者としての身体運動であり、そこに派生する感情は、生存を賭けた熾烈なものであった。そこでは戦いへの興奮ばかりでなく、死に対する恐れや忌避の感情も混じっていたことは頷かれる。しかしいずれにしても、それは敵を殺傷し、武力でポリスの目的を果たすための身体活動であった。オリンピア祭やそれに類する古代ギリシャの祭典（パンアテナイ祭・イオニア祭）は、敵を殺傷しうる兵士の身体能力に「競技」としての資格を与えた。「あらゆる種類のスポーツは、常に想像上の背景の中で行われる規制された戦闘である。」<sup>(38)</sup>自らのポリスの人間が、オリンピア祭を初めとした祭典の競技に優勝することは、何よりも自己のポリスの強靱さと安寧を保障する一つの象徴であったに違いない。しかしそこでは、パンクラチオンを含めて、すくなくとも意図的な殺人は捨象されている。戦闘を意識した競技として、兜をかぶり、脛充てをつけ、8kgもある重たい楯をもって走る兵士間の競走である「武装競走（ポプリトドモス）」が加えられていた（BC520年に登場したと言われている）。すなわち、早く移動する軍隊は、戦闘において勝利する確率が高まるために、武装競走は、より具体化された戦いの抽象化でもあった。BC490年のマラトンの会戦で、ペルシャのヘラス侵略の意図を悟ったアテナイは、フェイディピアデスをして、2日間にマラトンからスパルタまでの260kmに及ぶ距離を、救援を求めるために走らせた。そしてペルシャ軍に対峙したアテナイ歩兵部隊は、騎兵や弓兵の支援なしに、駆け足でペルシャ軍に突入していった。「駆け足で敵に攻撃を試みたのはアテナイ人をもって嚆矢」<sup>(39)</sup>とし、それは神がかり的な雰囲気醸成したという。そのマラトンの戦いで惜敗したペルシャは、急遽海軍を動かして、海路からアテナイを攻略しようとした。これを読み取ったアテナイの全軍は、陸路を全速力でアテナイに急行し、ペルシャ海軍がアテナイに到達する前に帰還したのである。<sup>(40)</sup>これらの強靱な体力は日頃から訓練されていなければ発揮されるものではなかったであろう。オリンピア祭の「優勝者が故国のポリスに凱旋するときには、ポリスは凱旋式を行い、あたかも戦勝の将軍のごとく」<sup>(41)</sup>迎え入れた。優勝者は、その身体能力の故に、実戦に於いても優れていた筈であるが、それ以上に優勝者は神によって祝福されたものと考えられ、実戦においても勝利を呼び込むものと考えられたため、とくにスパルタでは、「王の軍事遠征の際には冠の競技会の優勝者がその周囲に配置された」<sup>(42)</sup>という。

### (3) 闘技（アゴン）文化の諸相

闘技（アゴン *agon*）という言葉は「集まる」というところから派生し、アゴラ（広場）と類似の語源をもつ。「遊びは何物かを求めての闘争であるか、あるいは何かを表す表現であるかのどちらかである。」<sup>(43)</sup> 競技は本源的に他者を前提とし、文化が個人的に発生してくるものではないように、競技もまた、その根源は個人的なものではない。「競技本能とは、まず第一に力に対する渴望とか、支配しようとする意思とかをいうのではない…根源的なのは、他人よりも擡んでいたいという欲望であり、第一人者になりたい、第一人者として尊敬を受けたいという願望なのである。」<sup>(44)</sup> “一人遊び”の背後には、客観視された、あるいは客観知覚された自己が措定されている。競技（アゴン）は、競争社会がそうであるように、個人を刺激し、努力を賦活することによって、人間の能力を開発し、潜在的な可能性を引き出す。「いかなる才能も戦いながら展開されていかなければならない」<sup>(45)</sup> という確信は、もっとも重要なギリシャの精神原理であった。しかしその精神原理は、古代の強力な人間的家族関係、あるいは氏族関係というゲマインシャフトの紐帯のなかにあつて、その中に埋もれまいとする多くの個性的な人間を創り出した。彼らは、「ギリシャ全土のために立てる功績によって先頭に立とうとしたのであり、もし自分が他に抜きんでた働きをしなかったら、世界は滅亡する、と考えたのである。」<sup>(46)</sup> この真剣さが、ギリシャを不滅としたのである。

人間はかなり古い時代から、宗教的儀式として競技（アゴン）を行い、自己の勇敢さを神々に捧げてきた。古代メソポタミアにおいても、エジプトの歴史においても、ボクシングやレスリング、そして戦車競争の数多くのレリーフや絵画が残されている。人間はそれらの様々な身体的技能や技術を、もともと必要とされる目的のためだけでなく、常に「遊ぶ」ことに用いることで洗練し、文化を形成してきたものと思われる。その技能・技術は人間的能力—それは身体に留まらない—によって最大化され、その顕現と発露は競技によって試された。人間的な能力を開発するのは「神々」である。したがって能力の顕現は、神々の前で行われた。神々の前に、その能力や到達度を現わすことは、恰も幼い子どもが、学んだ人間的能力を母や父に見せようとする衝動に近似しているのかもしれない。古代アジアやミケーネ文明を継承していたギリシャ人の宗教的儀式も、当然これらの歴史的風習から影響を受けていた。祭祀は国家という社会制度が確立する以前の共同体においては政治そのものであったため、なんらかの祭祀で、人間が表現しようとしたもの、あるいは表現したものは、厳肅さと緊張の中に、神々に示現する現実世界における人間の生を象つたものであつたらう。その緊張と厳肅さは、同時に熱狂をも取り込み、日常から断絶された時空間で緊張を解放した。

古代社会において、人間が社会制度を構築し始めると、部族や胞族、氏族といった集団を形成することによって、相対的な集団の対立が表れる。「祝祭のとき、部族内部に対立し合う両派や両性のあいだで行われたもの、これが競技」<sup>(47)</sup> だった。その対立的構図は、競技によって輪郭を与えられ、あらゆる意味での社会的集団のアイデンティティを形成し、またそれと連結することになる。競技は、それが具体的な個人によって行われる場合でも、相対立する集団のアイデンティティの確立と確証を伴いながら、成立・発展していったと考えることができる。「勝者は尊敬を得、名誉を帯びるのである。そしていつもこの名誉と尊敬は、すぐさま勝者の所属しているグループ、関係者の全体に及ぼされていく。」<sup>(48)</sup> この波及効果は、アイデンティティの共有の確認とともに、競技を一層特徴づけるものになっていく。しかしそのアイデンティティの中でも最も古来より際だっていたものは、死者

に対立する生者としてのアイデンティティである。死者は、そしてその悲しみは、彼らに否応なく生き残る者のアイデンティティを感じさせ続けたのである。そして競技は、あたかも葬送の儀礼の如く行われた。常時戦闘状態に晒されていたギリシャ人にとって、生存への希求は人々を闘いに駆りたて、同時にそれを鼓舞する闘いのエトスは不可欠だった。ギリシャ人は自らを賦活し、また見る者のところを興奮させる競技によって、このエトスを再三再四確認しつづけたように見える。葬送の競技は、この意味で死者を弔い、生者のアイデンティティを確認する最も厳粛な「遊び」であった。

トロイア遠征にアキレウスとともに参加したパトロクロスは、幼い頃、賽子あそびで立腹し人を殺めた過去をもつ。このためアキレウスの家に引き取られ、二人は竹馬の友のように育った。二人してトロイアに出征したが、パトロクロスは、トロイアの王子ヘクトールに斃された。アキレウスは彼の死を深く悲しみ、憤怒をもってヘクトールを打ち倒し、その遺体を引きつり廻して仇討ちを果たす。しかしアキレウスの枕元に、痛ましいパトロクロスの亡霊が現れる。「アキレウスよ。…一刻もはやく、私を葬ってくれ、そして冥府の門をくぐらせてくれ。…一度私に火をかけたならば、もう二度と冥府の境から戻っては来れないのだから…決して私の骨をあなたの骨から離さず、一緒においでくれ。」<sup>(49)</sup> 魂は不死と考えていたホメロスは、パトロクロスを死者の世界に送るための競技、すなわち生者と死者のアイデンティティの確認を要求する。悲しみと怒りにかられ、羊、牛、馬だけではなく、12人のトロイアの貴族までもパトロクロスの靈魂の生贄として火葬用の薪で焼かせたアキレウスは、火葬が終わり、皆が帰ろうとした頃合いに、パトロクロスを弔うための競技を開くことを言い渡す。戦車競争、拳闘（ボクシング）、レスリング、そして槍投げなどが次々と催された。総大将アガメムノンを初め、オデュッセイアや多くの戦士が全力を尽くして戦うのである。弔いの競技であるにもかかわらず、彼らは弔いのための競技とは考えていない。故に、競争の着順についての争いまでも起こる。しかし、互いを傷つけあうボクシングは、最終的な決着をまたないで終了することを皆が了解した。競技には、敗者も含めて数多くの価値ある賞品が配られた。ときにその賞品は、死者の遺物でもあった。

アキレウスがトロイアの城内で戦死したあとも、アイアースは自らの運命の定めに従って命を失うことになることも知らず、アキレウスの見事な盾をめぐって、追悼の競技を提案する。老帥ネストールは、アキレウスの人生の華麗さを詠った。そのあと、徒競走、レスリング、ボクシング、弓術、円盤投げ、幅跳び、そして戦車競争、馬くらべが行われた。アイアースとディメーデースのレスリングは壮絶だった。「巨大な力をぶつけ合い、延々と渡り合い、疲れのあまり激しくあえぎながらも容赦なく戦い、口から地面に泡が無数に散って」<sup>(50)</sup> いった。ボクシングも苛烈だった。「二人の顎は乾いた革紐で打たれて鳴りひびいていた。おびただしく血が流れ、額からしたたる血まみれの汗は、二人の若々しい頬を真っ赤にそめていた。」<sup>(51)</sup> 戦闘そのものではない競技に、壮絶な勇気を顕現しあつたいずれの格闘競技も、しかし致命的な傷を負わせる前に、周りので仲介で止んだ。換言すれば、葬送の競技においても、勝敗そのものが問題だったのではない。「この行為の目的とするところは、後にくる結果とは直接の関係がなく、まずその行為の経過、成行そのものの中にある。客観的事実としての競技の結果いかん、そんなことは少しも本質的なものではなく、どうしても良いのである。」<sup>(52)</sup> 死者のまえに妥協なく披露される生者の勇気が重要だったのである。彼らは、アキレウスがこの世から去りゆくのを感じながら、神々の前でなおも生きている自分の勇気を

競技で示し、魂を賦活しつつ、人間的能力を競い合い、亡くなった者を讃え悲しみながらも、生き残っていることの何にも代え難い意義を再認識していたかのである。死者は生きているものにとってのみ意味がある。死者が与える生き残る者のアイデンティティは、神とは異なる死ぬべき人間の生命の儚さを伝えるとともに、生きていくことのかけがえのない価値を与え続けたのである。

「遊びは、最も優れた表現の優れているものを選び出すために競争の形をとる。」<sup>(53)</sup> ギリシャ人にとって、競技（アゴン）は神話の時代から、嫁取り婚を初めとして、あらゆる社会現象に浸透している。足が早く、金髪美しい女狩人のアタランテには多くの求婚者が群がったが、彼女は、「結婚か死か」を駆けて求婚者達を競争に誘い、次々に競争で負かして求婚者を矢で射殺した。金のリングでアタランテを躊躇させたヒッポメネスが、結果として競争に勝って彼女を娶った。あるいはクレステネスは、ギリシャのもっとも優れた青年を娘アガリステの婿に選ぶため、全ギリシャに公告し、あつまった青年を「それから1年間自分の手許におき、…求婚者たちの能力、性向、教養、行儀などを綿密に試験した。」<sup>(54)</sup> 結果、アルクマイオン家のメガクレスが選ばれ、その子供の一人がアテナイに部族制と民主制をもたらしたクレステネスであり、もう一人の息子（ヒッポクラテス）の孫がペリクレスである。嫁取りの競争は、ギリシャ世界に限らない。古代インド（「マハーバーラタ」や「ラーマヤナ」）でも、婚姻のための競技があった。重要なことは、「嫁取りの競争という観念が地上のあらゆる地域に存在しているという事実」<sup>(55)</sup> である。

アゴンは身体的能力の競争だけではない。言語は本源的に「遊び」の所産であり、それは物を表現しながら、物をイメージとして表現することによって物自体をはなれ、過去と未来を表現することによって現在という時間を超え、人間の行動を抽象する間断のない、極めて社会的に秩序づけられた遊びである。にもかかわらず、言語が変われば理解されないように、音と物との、あるいはいかなるイメージとも関連の必然性はない。ギリシャ人は、この言葉の美を重用し、追究した。美しさは、物そのものにあるのではなく、それを語る言葉にあった。このため事に付けて詩人を訪れ、あるいは祭典の優勝者を、詩人ピンダロスに語らせるのである。「いかなる文化の中でも詩は活力ある社会機能をもつ。…最も初期のギリシャ詩人は、みなその先人の痕跡を残して、著しい社会的機能をまだ保っていた。かれらは民衆に対して、教育者、警告者として語りかけた。その後ソフィストが登場するまで、詩人は民衆の指導者であった。」<sup>(56)</sup> 言葉における競争には、詩歌や悲劇ばかりでなく、古代の戦場では悪口合戦が行われ、出来るだけ相手の名誉を傷つけることを意図した。アテナイにおける言論競争は、法廷での訴訟合戦や弁論術の隆盛をもたらし、ソフィスト形成の重要な背景となった。「ソフィストたちは、どうやって難しい訴訟に勝つことが出来るかを、金儲けのために教え講じた。若い政治家はその経歴を、何かスキャンダルを嗅ぎつけて、それを告訴するということから始めるのが普通だった。」<sup>(57)</sup>

「神聖な行事、聖事のこと、ギリシャ語でドロメノン（*δρομενον*）」<sup>(58)</sup> といい、これからドラマが派生する。それは演じられるものというよりも、表現されるもの、しかも、自然と一体の過去の反復である。それは反復であって、確かに人間と無媒介に刻々と進行する現実ではない。しかし現実と一体化しようとするために、それは繰り返されるのである。ギリシャ人にとって、現実そのものが重要であったのではなく、現実を支配するものが重要であった。そのことを認識するために、非日常的な感情の高貴な高ぶりの中に、自分達を引

き戻す必要があった。連綿として語り継がれた神話を、数世代前の祖先の出来事のように考えていたギリシャ人にとって、世の中の構成原理である神話を題材とした祭祀としての劇の価値は、現実を支配するものを表現し、再現することによる再確認でもあった。神話が担っていたものは、運命の不可避性であり、「あらゆる時代、あらゆる民族の良心が共感することのできるような人間に向けられた責め」<sup>(59)</sup>である。神託によって未来を予測し、不幸を避けようと努力すればするほど、人間の予測を遙かに超えて、かえって神託は実現し、人間は没落を早める。しかし、「祭祀の基にある思想は…神々の心を動かし、神々がその出来事を現実に授け給うようにするもの」<sup>(60)</sup>であった。

ギリシャ劇は主に3月のアテナイで開催された大デュオニュソス祭で上演され（その他は12月のデュオニュシア祭、1月のレーナイア際であった）、酒神デュオニュソスに捧げられた。デュオニュソスは、牡山羊（Tragos）の神（あるいは牡牛）であり、デュオニュソス祭に屠られて悲劇（tragodia）の語源になった。悲劇は、「その起源においては…舞台文学ではなく、聖なる遊びであり、演じられた礼拝式であった。」<sup>(61)</sup>そしてギリシャ悲劇は荘厳な音楽や詩とともに上演された。音楽に限らず、歌や言葉によっても誘発される芸術的「感動」は、今日の私たちにとってもその発揚の原理が極めて不可解であるように、ギリシャ人にとっては、感動そのものが神聖なものであり、神々の直接の靈感と信じられたはずである。私たちはすでに神話の細部が「作り話」であることを知っている。にもかかわらず、私たちのところが揺り動かされる時、そのリアリティーは、ギリシャ人が感じたであろうように、「真実」以外の何物でもない。ここに人間的動機付けを伴う芸術的、教訓的仮構である神話（芸術）の真実がある。悲劇が宗教的儀式であった理由の一つでもある。「竖琴の音楽は…宗教上の礼拝の一部をなすものであり、その音調の感動的な力はおそらく葡萄酒の効験と同じように、神の直接的な靈感にきせられたと推断してもたぶん謬ってはいないだろう。」<sup>(62)</sup>神々の心理的干渉は、ギリシャ世界の認識を構成している重要な側面である。感動や驚喜は、誰よりもデュオニュソスによってもたらされる神的な情動や情念として受け止められていたに違いない。

悲劇によってギリシャ人は自身を教育し、「ポリスは市民をその一生涯にわたって教育するのである。」<sup>(63)</sup> 体育、音楽、祭礼、建築、芸術作品、劇などによって、「統治と服従を伴った都市における生活自体が絶えざる教育と見なされた。」<sup>(64)</sup> ギリシャの悲劇は誰もが知っている筋書きであったが、悲劇は、ギリシャ人にとって決して娯楽などではなく、学ぶべき道徳心やポリスの精神がちりばめられて、誰もが担うべき重要な祭礼的儀式であった。つまり、ギリシャ悲劇は社会的規範獲得のための重要な教育的手段であったのである。このために、合唱隊費用（コレギア）以外の、俳優への費用や作者への賞金は国家費用で賄われていた。ソフォクレスやエウリピデスなどの悲劇作者が意図したのは、悲劇の筋書きの形を変えた反復ではない。変更不能の筋書きを背景としながら、そこに人間の教訓を引き出そうとする作為であった。それ故、ペリクレスは、貧困者も観劇ができるようにするために、無産階級の人々に観劇代としての補助金をだしたのである。「社会教育の一つの面を形成しているのは、様々な祝祭、華麗な供儀、合唱と舞踏であり、これらはすべて祭祀と結び付いているのであって、またこの祭祀は神話として拮がりながらおよそあらゆる教養の拠り所にして源泉になるのである。」<sup>(65)</sup>

ソフォクレスは、報復や復讐が、次なる人間を介して報復や復讐を誘発し、世代を超え

て循環する人間社会の無情と神の摂理を訴える。サラミス海戦に自らも従軍したアイスキュロスは、敵国たるペルシャにおいても戦死者たちへの深い人間的な悲しみがあることを描き、あるいは、あらゆる技術の源であった火を人間に与え、ゼウスの逆鱗に触れて永劫の歲月を苦悩に苛まれるプロメテウスを擁護する。人間存在のいわば“原罪”を、人間に代わって背負う神のために、アイスキュロスは、その「縛られたプロメテウス」を借りて、ギリシャ宗教の総帥ともいべきゼウスを非難する。「ギリシャ精神の最大の事業の一つ、とくに前5世紀のアテナイのそれは、私たちには全くあたりまえの自明と思われること、つまり人間と神との違いを主張してゆずらなかつたことであつた。」<sup>(66)</sup> それほどにギリシャ人は神々に近かつたし、同時に自らが人間であることを確認しようとしたのである。

ギリシャにおけるアゴンの原理は、平等もしくは同等の力をもつものとの競い合いにあり、一方的な専制政治の中で見せ物として発展したものと異なっている。いわゆる古典期以前には、等しく戦士となり市民となる人たちが、興奮と喝采に満ちながら、競技を見守つた。クノッソスから出土しているミノア文明のフレスコ絵画には、儀式を見つめる観衆が描かれている。それはまさしく、観衆が「観客」として存在したのではなく、祭典の不可欠の参加者として存在していたことを示す証拠である。「ホメロスは集合場所を意味する一般用語のアゴンを、…観客用の場所と出場者が競技する場所とを全く区別していない。」<sup>(67)</sup> ギリシャ人は祭典の競技に、感情の活性化による興奮と娯楽を求めたかもしれないが、それでもすくなくともこの時期までは、後のローマ人達のように、剣闘士同士の殺し合いを認めていたわけではなく、また人と野獣を闘わせたり、公衆の面前での絞首刑を、娯楽として楽しむ民族ではなかつた。しかし、やがて戦争が戦争技術の専門化と、従軍義務を金銭に代替する価値意識の変容によって次第に職業兵士（傭兵）によって闘われるようになったのと同様に、ギリシャの祭典における競技も、勝利を目指す職業アスリートによる見せ物に変質していった。傭兵は、ポリス的人間の生命によって守られていたポリスが、金銭で守られることを意味する。いかに傭兵が忠誠を誓っても、ポリスは精神的代理人によって存続することはできなかつた。それと同様に、全人的アレーテが、職業アスリートによって追求されることはなかつた。「これらプロの競技者達は、粗野な性質をもち、無教養であり、また騒然とした時代に、貧困かあるいは遠隔の後進地域における原始的な環境に生まれ、いかなる知的活動からも締めだされていた。」<sup>(68)</sup> 観客はかつてのアイデンティティを共有し、その意味で参加する観客というよりは、娯楽のための興奮に飢えた熱狂的（ファナティック）で無慈悲な観客に墮落し、それにともなつて競技は、一部で人間の残忍性を再生産する凶器となつた。すなわち、ボクシングやレスリング、パンクラチオンといった競技は、どちらかが致命的に敗北するまで行われたからである。「群衆は…敗者を軽蔑し、勝者には熱狂的な声援を送つた。」<sup>(68)</sup> 貴族的自由人のなかで命脈を保っていた全人的調和というギリシャ的理想像であつたカロカガティアの精神は弱体化し、競技技術の専門性の追求と一部分の強調によって包括性を喪失し、破壊されていったと言える。「いかなる特殊能力も人間を単なる部分となし、したがって俗業的に（卑賤に）する。」<sup>(69)</sup> 職業化した競技者は、すでに自分自身のために競技することができなかつた。彼は金銭によって他者を代表し、彼らが期待するものを与えるための道具となる。換言すれば、「アマテュア精神」とは、人間を解体し、部分化したり、人間的発達という目的以外に人間を従属させる傾向に対抗する自覚的な自律性であり、いかなる卓越した専門性をもつとしても、一人の全人的な存在であるための不可欠の姿勢と言ひ

うるのである。

重要なギリシャの祭典でありつづけた古代オリンピックは、最終的にはAD393年の第293回を最後に消滅したと言われている。古代オリンピックを支えた最も基本的な精神原理は、ヘラス地方に住むギリシャ人たちのオリンポス信仰にあった。それは、神の前に、特殊な身体的能力や文化的能力を披瀝するとともに、高度な専門性をもちながらも、幅広い人間の内在的能力や可能性を開発しようという意識に支えられていた。植民都市が小アジアやイタリアに拡大することによって、古代オリンピックの参加領域は拡大したが、参加資格は、依然としてその血筋と精神的アイデンティティをもつギリシャ人であることだった。「すべての民衆共同体は、自ら神的となりうるまさにその程度だけ、世界に対して神的なるものを語ることが出来たのである。彼らの神的なるものとは、彼らの独創性の無限の基盤にほかならない。」<sup>(70)</sup>しかし、ローマ帝国が財政的にも古代オリンピックを支援してきた歳月は、ローマ帝国が、ギリシャ精神を尊崇していた時代のみであった。キリスト教化したローマの支配下となったギリシャでは、もはや多神教であるゼウス信仰に関わる精神的、宗教的原理は容認されなかった。つまりオリンポス信仰に基づく文化的原理が、世界宗教を目指したキリスト教という一神教の政治的あるいは精神的支配によって破壊されたときに、一千年以上も続いてきた古代オリンピックもまた消滅した。再び西欧が、“スポーツ”を社会的に再生させるために、これから一千年以上を要した。

## 2. ギリシャ精神における生

### (1) 人生の価値

「ギリシャ哲学は最初から私たち近代人がほとんど明瞭に自分に課することの希なある根本的な問題について思い煩っていた。それはみずから問うていた『善とは何であるか』と。そしてその意味するとことは『人生の価値要素は何か』、あるいは『生きることにおける私たちの主要目的は何であるべきか』である。」<sup>(1)</sup>それはギリシャ人が道徳的な存在であったからではない。むしろ人生が、生きるに値するものであるかどうかを問うほどに、過酷であったからである。ギリシャ人は、自らを神々から区別し、しかし同時に「善とはなにか？」と問い続けることで、動物からも自らを区別した。ギリシャ人は慢性的な戦闘状態の中で生きていた。「人間の情熱というものは、その畏敬する道徳的力の前でしか立ち止まらないものである。この種の権威がいっさい欠落しているならば、支配するものは弱肉強食の法則であって、潜在的にせよ顕在的にせよ、戦争状態は必然的である。」<sup>(2)</sup>かれらの道徳性や倫理性は極めて未成熟だったし、彼ら自身の行為を制御する力はなかった。むしろギリシャ人が懼れたのは、体得されてきたノモスとしての慣習である。そのノモスが要求する限りで、ギリシャ人は道徳的だったにすぎない。

しかし、ギリシャ人は、人生の価値が富みに収斂されるものではないことを充分知っている。アイスキュロスはペルシャがサラミスで全滅した凶報を聞くダレイオスの亡霊に語る。「不幸のさなかとはいえ、日々の魂のよろこびを忘れてはならぬ。やがて死にゆくものに、富はなにほどにもやくにたたないのだ。」<sup>(3)</sup>喜びを伴う生命が、同時に無数の耐え難い、かつ解決困難な苦悩に満ちていることもギリシャ人は実感していた。彼らは幾度「死んだ方

がました」と呻吟したことだろう。残虐な殺戮を伴うこの世の悲惨や苦難の数々は、神々の仕事、すなわち運命として受容されていた。しかしその運命は人間には見えず、未来は未知であった。したがって、過酷な人生の構造を受容し、かつその理を弁明し、あるいは理解するために、ギリシャ人は彼らの過去の記憶であった神話を必要としたのである。人間から過去を消し去れば未来も消える。絶滅する運命の種族と思われた人間のために、プロメテウスは、「技術」の源である火や、「記憶」の源泉である文字とともに、運命を人間の目から遠ざけることによって「希望」を与えた、というのである。人間にとって、自らの将来が、神のように見通せるものであれば、最大の努力を費やして「今日」を生きることはできないであろう。希望とは未来への盲目であり、盲目は未来への自由を保障した。したがって未知なる世界に努力という主体的な生存原理が作用する。「一日限り」の人間にとって、運命に盲目であることによってこそ希望を紡ぎ、人間は明日へと連結し、一日限りの生を超える存在となることができる。かくしてゼウスの意図を挫き、人間の恩人となったプロメテウスは、しかして人間から何らの報酬や援助を貰うことさえ出来ず、死ぬことさえ許されない罰に服する。だからこそアイスキュロスは、人間を可能にしたこの神のために、最高神ゼウスをも弾劾する。「ゼウスが王位を追われるときがくる…彼女（イオー）が父（ゼウス）より強い子を産むだろう。…その運命から逃れる術はない。…父クロノスの呪いは、その時こそ完全に成就されよう」(4)と。それは報いを希求する哀願にも似た人間の神話の解釈であった。

神話の精神は悲劇の中にも貫徹される。「ギリシャ悲劇は、人間達の諸問題において支配するのは法であって運命ではないという信念の上に立っている。」(5) だれにも責任転嫁することのできない悲劇的結末は、その過程の諸処に、些細な個人的判断が介在している。それがいかに善良で、悪意なきものではあっても、それが集積すれば、恐ろしい取り返しのつかない結末に至りうることを、ギリシャ人は経験していた。神話の中に貫かれる人間的感情（憎悪）の錯綜は、世代を超えた報復の連鎖として認識される。それは一人一人の生に自律性を託し、正義を規定するいかなる単一の原理も存在しないという価値の多様性を具現する。だから彼らの生命の一回きりの、しかも短いかなさを測る確実な指標として、神々は不死でなければならなかった。ギリシャ人は悲劇そのものを欲した訳ではない。恰も個々の人間のその時々偶然の意志と行動が錯綜する渦中であって、なお最終的に貫徹される神を意志を描こうとしたのである。つまり、ある結果をもたらすものは、人間の予知能力を遙かに超えて発揮される運命女神の意志である。その意志は、しかし、あらかじめ決定されていたシナリオの有無を言わさぬ具現化なのではなく、人間の努力を前提として発揮される意志なのである。ギリシャ人は、この世が人間の努力に依存していることを十二分に知覚していた。彼らは、悲劇的結末を通して貫徹される神の意志に畏敬の念を抱いたかもしれないが、同時に、人間の血みどろの努力にこそ、涙を流し、かつ喝采したのである。それは自らの存在への賞賛であったに違いないのである。

ギリシャ人達は、自らが死ぬべき人間であることを辛いながらも知っていた。しかし一方、限られたはかない生命であるからこそ努力することによって獲得される、例えようもなく価値あるものとして、限られた世代を超える「英雄的榮譽」を意識していた。この世で重要なことは、長く生きながらえてことではなく、安穩に生活することでもなく、一瞬の儂い夢のような榮譽にこそ、おのれの生の時間を超越する生命の価値があることを、ギリシャ人は強烈に感じていた。その榮譽は、神々に反照された賜であったが、神々とは、彼らが、自然

への畏敬として歴史的に創造してきた神々である。むろんその自らの「創造」を、ギリシャ人は認識しなかったが、ギリシャ的精神そのものが創造した神々を越えようと努力するギリシャ人の精神は、そこに「克己」という人間の無限の積極的な自己開発の可能性を宿していた。その過程にある報償とは、金銀などの物質的報償では報われない。勿論、豊かになるためにポリス間でも略奪は行われたが、人間的な生命と切り離されたいかなる報償も、ギリシャ人たちにとって究極的な報償とはならなかった。精神的な努力に見合う物は、精神的な報償でなければならなかったし、すべての報償がそのためにあるように、自らを鼓舞する報償でなければならなかったのである。ペリクレスはペルシャ戦争戦没者への追悼演説で述べる。「この人々は一人として、持てる富の快楽に惹かれてひるんだり、貧しきを逃れて富む日の希みに死をためらったりした者ではない。かれらは、富よりも敵を罰することを希求し、これこそ生命を捨てるに類いなき花と信じたのだ。…退いて生きながらえるより、守って碎けるを良しとしたのだ。不名誉な打算を避けて、戦列を自らの五体をもって死守した彼らは、千載一遇の好機を利して、恐怖よりも栄光に極まって逝ったのである。(傍点引用者)」<sup>(6)</sup>

「人間的境界を越えゆく精神としての人間という理想」<sup>(7)</sup>を支えたアレテーは、名誉や栄光を目指したとはいえ、個人の豊かさや能力の優越性の誇示、あるいは自慢や自尊心を充たすためだけに希求されたのではない。あらゆる面で卓越性を示すことは人間の個的能力の開発であったと同時に、なによりも自己に関係づけられた過去の人々や未来の人々の名誉のために捧げられた現在の人間的努力であったのである。「人が他より抜きんでようとした時、彼を駆り立てる最も強い衝動の一つは、自分は祖先を手本として生きなければならず、自分を産んだ家系に恥じない人間でなければならないという信念から生ずるものである。」<sup>(8)</sup>つまり「アレテーの報酬は自分の仲間や子孫の賞賛なのである。」<sup>(9)</sup>ギリシャ人は、ポリスの産みの神々と繋がっていたばかりではなく、その神の末裔である祖先と繋がり、そして後の世代とも、家族的生存のアイデンティティで繋がっていた。婚姻制度の如何を問わず家族が歴史的に形成されて以降、家族は何よりも個々人のアイデンティティを構成した重要な土壌であったはずである。自分の生涯は、その家系に誇れるものでなければならず、ましてや汚名(恥)を着せるものであってはならなかったのである。ソフォクレスはオイディプスの娘「アンティゴネー」をしてその名誉を描く(上演はBC.441年)。アンティゴネーの二人の兄は、テーバイの王位を争って両者とも相討ちによって斃れたが、テーバイの街を攻撃した兄のポリュネイクスは、テーバイの王位を継いだ叔父クレオンによって叛逆の罪に問われ、亡骸の埋葬は禁じられ、それを行う者は死罪とされた。しかして妹のアンティゴネーは、王の命令を無視して兄を埋葬する。国禁を侵して捕らえられ、王クレオンの前に引き立てられて詰問されたアンティゴネーは、王に敢然と逆らって曰く、「正義の女神が、そうした掟を人間の世にお建てになつた訳でもありません。…またあなたのお命令にそんな力があるとは思えません。…書き記されていなくても揺るぎのない神々のお定め掟を、人間の身で破り捨てができようなどとは。(傍点引用者)」<sup>(10)</sup>アンティゴネーが憚ることなく護ろうとしたのは、自己の存在を意義づける身内の人間(家族)に対する限りない不滅の愛情とともに、それを支えるノモス(慣習)としての人間の掟であり、同時に斃れはしたが、勇敢に戦った兄の栄光と名誉であった。彼女は、たとえ恣意的な国禁を侵して死罪になろうとも、兄弟の名誉を守り、身内の身体を埋葬することは、いわば人為的、一時代的な法を遙かに凌ぐ神々の掟、すなわち「こころの法」であり、絶対的命命であることを主張する。そのこころの命

命に従うことこそが、兄のためだけではなく、同時にこの世の生を受けた自分の生存のアイデンティティ、すなわち兄妹としての使命であり名誉でもあることを主張し、自らの正義にしたがって、昂然として死に赴く。彼女の死は、恋人であった王の息子の悲嘆による自害を誘発してクレオンに復讐する。かくして、生命を賭しても兄の名誉を守り、そのノモスに殉じるギリシャ精神は、戦士共同体としての男性社会の中でありながら、アンティゴネーを通して、女性の中にも生き活きと体现されていた。

## (2) ポリス精神の崩壊

BC4世紀、アリプロンの賛歌は歌う。「人々に与えられる最大の幸、健康よ。…健康なくして幸福なるものはなし。」<sup>(11)</sup> ギリシャ人は健康の価値を知っていた。しかしそれは生きる目的であったのではない。あくまでもポリス社会での理想と、ギリシャ精神を最もよく示現し、それを体现する人間の不可欠の属性として理解されていた。ギリシャ人にとって、健康とは、アレテーの一部であったであろう。それはポリスの財産である身体を不断に鍛錬するなかで獲得される、ポリスの存続と繁栄のための前提であり、したがって彼らが生存するための必須の要素であったに違いない。「ほとんどのギリシャ人は60歳まで従軍することが求められた。」<sup>(12)</sup> そして多くの人が高齢まで生存した。「ゴルギアスは100歳を超えて没し、クセノファネスは92歳以上、デモクリトスは90歳以上、ソフォクレスは90歳、プラトンは82歳で没した。」<sup>(13)</sup> しかしそれは結果であって、長寿をこそ幸福と考えていた訳では決してない。むしろギリシャ人は、高齢になることを恐れた。曙の女神エオスは、トロイア王族の若者ティトノスに恋するあまり、彼を奪い、ゼウスに、ティトノスに永遠の命を与えてくれるように頼んだ。「ゼウスは…彼女の願いを叶えた。しかし女神は愚かだった。」<sup>(14)</sup> エオスはティトノスがやがて青春を失い、老化し、白髪の老人になっていくことに考えが及ばなかったからである。やがて閨を共にすることもなくなり、「憎むべき老年が彼を打ちしぎ、彼が己の四肢を動かすことも持ち上げることもできなく不可能となったとき、…女神は」、若き日の甘い恋を封印するかのよう「彼を一室にいれ、輝く扉で彼を封じ込めたのである。」<sup>(14)</sup> ティトノスは老いさらばえてもなお、死ぬことができず、力のない声を上げ続ける。不死への憧憬にもかかわらず、老化の惨めさをエオスの神話は物語る。だからこそ、若いニンフとの永久の命の保証というあり得べくもない誘惑を敢然と拒否し、オデュッセイアは、妻ペネロペの待つ故郷のイタケーを目指す。エオスの神話にギリシャ人が込めた意味は、長寿の人生が重要なのではない、ということは明白である。あるいはエンデュミオンの神話も同様である。月の女神セレネに愛されたエンデュミオンは、永遠の眠りと引き替えに、ゼウスから不老不死の美しい身体を与えられた。しかし不老不死が約束されたとしても、永遠の眠りとは死以外の何を意味したろうか。ギリシャ人は不老不死を希いながらも人間の宿命である加齢を不死で超克することも、意識のない不老不死の身体も無意味であることを認識していたのである。彼らは肉体も魂も、健康も、その短い人生の一瞬一瞬に共存することを知っていた。肉体はやがて減じ、そして衰えゆく肉体の中では、もはや己を活かす魂ももはや生気を失うことを、そして何よりも意識が失われることを、彼らは懼れたのである。澁刺とした身体と精神性こそが、かけがえのない生であることを知悉したギリシャ文化は、この意味で徹頭徹尾、青春の文化であった。

ポリスにおける持続的な青年達への社会教育として、悲劇やギムナシオンを準備し、自給

自足（アウトアルケイア）を基本とした経済的自立性を維持しながら、カロカガティアという身体と精神の不断の努力による全人的な人間の完成を求め、そしてまた戦士としてポリスのために生命を捧げたギリシャ人の生き様は、所与としての生存環境の中で、最大限の能力の開発によって人間の生を目指そうとする自然性を示現している。健康という概念は、戦闘に明け暮れるギリシャ時代には、極めて重要な意味を持っていた身体が孕む価値観の中に埋もれてはいたが、古代ギリシャのポリスの人間におけるアイデンティティーの中に、未分化ではあったにせよ、それだからなお一層内容豊かに、かつ奥深く含意されていた。それは身体的にも壮健で、精神的にも自由で神々しく生きるということと不可分の条件であり、希求されるべきアレテーと決して分離することができない人間の生存の属性だったのである。

ギリシャ人は宗教という言葉を知らなかった。それまでのあらゆる神話を飲み込んで再構成した多神教のギリシャ人にとって、森羅万象は神々に充ち、神々の具現だったのであり、生活そのものが宗教であったからである。オリンポスの多神教とその信仰は、「多くの宗教体系とちがって、それは概して進歩を許した。それは単に服従的徳ばかりでなく、敢為的徳を奨励した。それは…自分を過ち得べきものと認め、悩み呪い迫害する前に三度反省する精神をもっていた。」<sup>(15)</sup> これらによって、余りにも人間的なオリンポスの神々は、しかし一見合理的ヒエラルヒーとも思える一神教の呵責なき専断と残忍さからギリシャ人を救ってきたのである。ペロポネソス戦争開始直後、疫病に見舞われたアテナイ人が怖れたのは、疫病そのものではなかった。アテナイ人が最も怖れたのは、罹患することで、神から見捨てられることだった。その絶望感は、彼らがいかに神々を慕い、また神々とともに生きていたかを物語る。しかし、同時に悲劇的であったのは、アテナイ人の道徳的な、あるいは信仰心の自壊が、この疫病で加速したことだった。つまり、疫病による無数の屍体は、彼らの身体に対する概念と、オリンポスの神々への信仰心を切り裂き、疫病の惨劇が酷ければ酷いほど、人々は死に無反応となるとともに、刹那的かつ利己的になっていったのである。「人々はすぐに絶望してしまい、…家畜のように死んでいった。…病人は独りのこされて死んだ。…人々は打ち続いて身内を失ったために埋葬の資材にも事欠くようになり、多くは恥も外分もない仕方でも遺体を取り扱った。…人の捉も神への恐れも拘束力を失った。」彼らの多くは、「健康も富もひとしく長続きするものではないと考え、快樂にふけて一時の愉悅を大事なものとした。」<sup>(16)</sup> ソフォクレスがアンティゴネを介して描いた家族の絆、すなわち家族を通して貫かれる個人的な人間存在の歴史的継続性への確信は、人々をなぎたおしていく疫病の前に無惨に瓦解していたのである。問題はこの疫病で何万人の人命が失われたかではない。いかに人々の心が、あるいは社会的な確信が、疫病によって破壊されたかである。疫病は身体を蝕み、生命を奪うばかりではない。社会の精神を破壊するのである。そして、社会の形成も崩壊も、つねに人間の内部から起こるものである。

戦争や追放によって人材を浪費しつつ、不毛な誣告合戦や訴追を嫌って多くの知識人は政治の分野から遠ざかった。大義のない政治抗争は、市民の義務であるとソロンが喩した政治から有能な人々を遠ざけた。シケリアで戦死した将軍ニキアスの息子ニケラトスと兄弟のエウクラテスは三十人寡頭政権への参加を拒絶したために殺され、その子孫は、一方で民主政権からも、親族の財産没収という誣告を受けることになる。裁判に引き出されたエウクラテスの息子はアテナイの裁判官に向かって糾問する。「私はいかなる人もわれわれのために取りなしてくれる人として召喚することができない。なぜなら、我々の血縁者のうち、ある

者は国家の勇敢な戦士として…戦死し…、ある者は三十人僭主のもと民主制のために、また諸君の自由のために毒人参を飲んでいるからである。したがってわれわれがこのように孤立しているのは、われわれ一族の功績とこのアテナイの悲惨な状態のおかげなのだ。」<sup>(17)</sup>

ペロポネソス戦争の過程における道徳的頹廢やアテナイの没落の経験を通して、その超克を意図したプラトンを初めとする BC4 世紀の哲人や知識人は、国政への参加を忌避しながら精神的生活に逃避し、一神教的態度への志向性を強めた。「国家」も「法律」も理想的哲人による一神教的支配の構図であり、それは理想的展望というよりはむしろ、ギリシャ世界の絶望の裏返しの表現のようにも見える。ペロポネソス戦争の敗北、つまり敗北する筈のない文化的優位性を保ちながら、文化的に「いやしい」スパルタによって暴力的な敗北を経験したあとのアテナイ人は、たとえスパルタがペルシャの財政的援助をうけていたものであったにせよ、この世の目的が戦いの「勝利」ではないことを経験せざるをえなかった。勝利を世界の筋書きの結末として描くことが出来なくなったアテナイ人は、戦いにおける結果を不問にする形で、「最善の努力を尽くした」ということに意義を見出す以外に、アテナイの存在意義を守る活路はなかった。ソクラテスの門下生でもあり、のちに一切の奢侈を排したキュニコス（犬需）派の開祖となったアンティステネスは言う。「アレテーこそは善である。」そこには深刻な人生哲学の危機に陥ったアテナイに代表されるギリシャ文化の、現実を超克せんとする苦悩があった。こののちギリシャ文化は、墮落した世界を救済するかのようになり、いずれも倫理性を研ぎ澄ました二つの異なった人生哲学、すなわちあらゆる奢侈を戒め、極貧と理性の崇拜の中に人間の完成を求めつづけるストア派と、一切の価値観、したがって善の根源が直感的快にあることを説くエピクロス派を開発していく。

哲学は社会を反映する。ストア派にとって「哲学とは、実践上の智慧を教える学、徳の練習、徳への予備校、倫理生活を律すべき諸原理に関する学」<sup>(18)</sup>であり、エピクロス派にとっても、哲学は「概念と論証によって幸福な生活をつくりだす活動」<sup>(19)</sup>であった。にもかかわらず、いずれの哲学も世界から自立し、独立する個人を希う。その証拠に、ストア派の希求するアパティア (apatheia) とはパトス (pathos) の否定であり、「なににも驚かず、なにものをも恐れず、かれには弱みも煩惱もない。…すなわち絶対の非情による絶対の無苦である。」<sup>(20)</sup> 一方エピクロス派の要請するアタラクシア (ataraxia: ものに動じない心) も、感動を捨て、あるいは感覚を拒否し、社会との生き生きとした接触を忌避する態度 (ラテ・ピオサス=隠れて生きよ) を奨励し、世界から孤立する人間を理想としたのである。

ストア派は、拒否できない所与としての生存環境としての世界を、合理性に貫かれた神の法則と考えた。世界を神の具現した肉体と考え、人間的最高善とは、神である自然の普遍的な法則とその合理性に従って生活することにあるとする。その『『最善の世界』とその合目的性という学説にもかかわらず、いっそう深い根底においてはやはり厭世的』であった。<sup>(21)</sup> キュレネ派のヘゲシアスの講義を聞いた聴講者のうちのかなりの人々が、彼の厭世的世界観に同調して自殺したと言われている。

ストア派にもエピクロス派にも、最早、かつてのギリシャ人のように、世界に感動と魂の賦活を求め続けた外に向かう情熱的な姿勢が見いだされない。あれほどギリシャ人が自己の存在理由を結びつけたポリスと世界を、ストア派は人間の産土とは考えなかった。彼らはポリスの代わりに、「全人類はおなじ法則と道徳をもつ一つの大きな協同体をつくらなければならない」<sup>(22)</sup> として、「最初にコスモポリタニズムの理念をかかげた。」<sup>(22)</sup> 「ゼノンにとっ

て、人間の知性は単に神に似るものではなくして、神であつた。(傍点原文)』<sup>(23)</sup> かくしてソクラテスが死をもって訴えた理念は貫徹されようとしていた。身体も健康も、主観的観念の明証性以外のすべては、外在的で取るに足りない価値のないものになりさがっていったのである。

### (3) 健康と生存の意志

ギリシャ人がその身体と精神に掛けたアレテーの意義は、今日の健康と疾病の対立的な把握の地平を超えている。ポリスはさしずめ今日の地域社会である。ギリシャ人にとって生命そのものと言ってもよかったポリスにおける生活態度が教えているものは、広大な国家の統一的支配原理によっては、おそらく人々の生き甲斐を支えることは不可能だったということである。古代のペルシャやローマ、あるいはモンゴル帝国など、人間の歴史の中に出没する大帝は、文化や思想、支配形態を強制することはあっても、地域に住まう人間達の内発的な生き甲斐を保障するものでないかぎり、長期に亘って存続することは不可能であった。このことは、おそらく現代でも真理である。近代兵器の量と質で格段に勝ったアメリカやロシアが、互いに代理戦争の様相を呈したとはいえ、ベトナムやアフガンで敗北した理由でもある。アレクサンドロスは「彼らの道を横切る一切の宗教を愛想よく受け入れ」<sup>(24)</sup>、スペインを攻略したムスリムはキリスト教を許容した。<sup>(25)</sup> つまり大きな国の崩壊や内乱は、政治思想や社会制度を遙かに超えた人間の生存原理に対する問題を提議している。生活人が呼吸する地域・生活圏の固有性は、現代の Globalization がどのように普遍的な情報や技術、あるいは商品を拡散させ、そのことによって人間の可能性を拓くとしても、決して否定されない個性性なのであり、ヒポクラテスはその医学的側面を「空気、水、場所について」で示したのである。換言すれば、私たちは、その個別的固有性を貫くことによるのみ、世界へと連結する。「一都市がその自由と特権のために全世界を包含する方が、一国が生まれを異にする人々を同胞とするよりも、より多くの機会に恵まれている。」<sup>(26)</sup> 人間的な生活には、固有の時空間が必須であり、「歴史上、画期的な成長期はすべて、都市爆発という形で自己を表現したのである。」<sup>(27)</sup> 社会を形成する生命力に溢れていたギリシャポリスが、時代を超えて私たちを魅了し、かつ大帝国ではなかった理由がここにある。

ペロポネソス戦争以前のギリシャ人の生き様が鮮烈に訴えてくるのは、健康概念が、生命のアイデンティティともいうべきものと分離しがたく融合している点である。すなわち、「健康とは何か」と設問する背景には、同時に、「何故生きるのか」あるいは「何のために生きるのか」、という設問が必然的に付属しているのである。彼らの目的は明確であり、かつ切実だった。動物的生を遙かに超えて存在しようとしたギリシャ人の生きる目的は、ポリスの安寧のための活動の中に、神々に媚びることなく、人間であることを強烈に主張したものであった。ギリシャ人がカロカガティアによって目指した人間的完成は、人間の生きる指標ともなったが、それは一個人の中に忽然として湧き出したアイデアではなく、人間の生き甲斐を鼓舞する社会の構造に支えられていた。それは、近代のルネサンス人やピューリタンなどと同様に、彼らの生きる固有の時代の最も重要で本質的な課題と不可分に連結されていたのである。

健康や疾病に関する概念は、人間が自然と世界を解釈する一つの歴史的な認識論である。人間にとって、生命と生きる目的とを分け隔てることができないように、健康と生命は、分離しうる概念ではない。身体に呪縛された健康の概念は、身体と精神に関する二元論の現代

的な徒花である。その延長線上にある現代の医療は、生体の科学的解明と理解を深化させることによって時間軸における生存の可能性を高めたが、一方で種々の変異を「異常」として強調することによって疾病概念を拡大した。結果として医療の支配領域を拡大させ、医療依存への態度を助長することによって、むしろ健康の価値を貶めた観がある。しかし、疾病（異常）への反照概念としての健康（正常）は幻想である。なぜならば、いかなる病理的過程—生存にとって「不利な」多様な生物学的内部環境の動揺—も随伴しない人間は、一瞬たりとも存在し得ないからである。すなわち、完全な健康人は不可能である。生命過程は常に「病理過程」と共存しているのであり、外界との葛藤こそが生命である。だからこそ、その葛藤の結果として、生物種には絶滅があり、また進化がある。

あらゆる個的な生命は死滅することによって、種の生命を更新する。滅びゆく個体と新たな個的生命の誕生という崩壊と生成の相剋の過程を意識的に制御している主体は存在しない。しかし、エネルギーを生命へと作り替える極めて巧妙な過程において、その生命の更新の一瞬に、種は永劫の未来を賭けている。この遺伝子の組み換えによる更新がなければ、環境に適応できない生物は死滅しかなく、生命の変異も、適応も存在せず、したがってあらゆる生命はすでに存在していないであろう。換言すれば、生命の可能性とは、自己を超えていく能力にある。すくなくともそれまでの自己（個）を否定し、集積した過去の膨大な記憶ともいべき遺伝子プールから多様な反応性を確保して環境変化に対峙し、ときには突然変異によって生じたあらたな遺伝子を取り込んで遺伝子プールを更新しうる自律的能力にあると言いうる。しかしそれらは複製と進化を続ける生命一般に妥当する。それ以上に重要な人間としての可能性は、自然としての身体的機能、すなわち自然が作り上げた中枢神経の機能を利用し、無限の知を創造し、その批判的継承をもって知識を蓄積し、それを応用しうるところにある。すべての知識は、人間自身が自然の産物であるという意味を含めて、自然に関する知識である。自然から乖離した知識は妄想であり、利用不能である。個体の死滅は、生命を支配する客観的原理であり、何人たりとも超克できない。その原理を主体的に受け止めれば、日々自壊する私たちにとって、健康とは、その自壊との戦い—自己が適切に生成し、持続し、そして適切に消滅していく過程—の最前線に位置する内的な生命原理である。人間そのものというよりも、個々の細胞の有する潜在的な可能性を最大限に引き出すことによって、統合された臓器としての機能を極大化すること、そのことは、個々の臓器を統括する中枢神経という機能を極大化するということと同断である。すなわち健康とは、身体という自然の合理性を、生命過程における不可避的な中枢神経の機能で自らを制御しつつ、「いかに生きるべきか」という問いに収斂しうる能力とも言いうる。その問いが、限られた生きる時間の中の活動を、自己に関係づけられた社会的な、あるいは人間的文脈の中に収斂させるとき、まさに生命のアイデンティティの不可分の属性を構成する。人間は、この問いがなければ進歩しない。「人は自らの生の外部に存在理由をもたない限り、生きることはできない。」(28) すなわち、物質代謝的な植物的生命という次元を超えるためには、その生を「意味あらしめる」ための生きる意味をもたなければならない。ギリシャの神々が、英雄アキレウスに、「平凡な長寿か、夭逝の栄光か」と迫ったとき、アキレウスが明確に選択したように、ギリシャ人たちの輝きは、「美や栄光なくして、この世の一切が空しい」という確信にあったことを私たちに教えている。しかし、「自らの外部」とは、最早社会や国家ではなく、それらが「生き甲斐」を準備し、あるいは保証する時代は疾うに過ぎている。むしろ自由であるとともに

孤独である近代以降の個人にとって、危機や困難さは、いかにして社会の構造的な理解に根ざした確固とした生き甲斐を開発しようのかにかかっていると見える。そして教育の本質的な使命はここにある。

労働を恥辱と考え、宣戦布告もない不断の戦闘状態にさらされ、残酷な殺戮が繰り返された時代にあつて、それでも常に生き延びることを強いられたこの民族にとって、人生は尊い価値あるものとは殆ど見えなかった違いはない。ギリシャ人は、征服されたあとに「生き長らえることは、故国のために戦死した人たちに対する裏切りのように」考えた。「ある者は自刃し、またある者は女子供を刺し殺して火中に投じ、あるいは絞め殺して貯水槽に突き落とし、そして自らは屋根から身を投じて死んだ。」<sup>(29)</sup> 彼らは、恥辱の体現者である奴隷になることを拒否し、隷従の生を否定した。与えられた生命は「自由」でなければならなかったからである。そのようなギリシャ人に、どうしても必要であったのは、生が価値ある何物かであると思えるための「生き甲斐」であつたろう。それは不死の神々を目指す英雄精神となり、それを具現する身体的能力であり、大理石を穿つ彫刻となり、生の状況を感動的に伝える音楽に彩られた厳粛で荘重な悲劇であつた。数多くの祭典でそれを確認しつつけながら、彼らの生き甲斐は芸術作品としての「ポリス」に集約されたのである。

健康は生き甲斐と共存する。生き甲斐とは、経験知と感性に支えられた生存の意志である。それは高邁な理想というレベルではなく、そのような場合があるとしても、多くは日常の具体的な人間関係や生活環境が醸成する肯定的な感情に裏付けられたものである。それは健康の必要条件であり、多彩な振幅をもつ主体的な心理的経験としての生存の駆動力である。生命に意味を賦与する感性が容易に測定できないように、健康もまた、他者との比較によって標準化された身体的諸条件の充足度と等価ではない。そして、生存の意志を喪失すれば、健康とは空虚な概念である。人間が「悲しむ」ことは健康である。それは悲哀に耐えて生きる人間への優しい心を育てるからである。人間が「苦しむ」ことも健康である。それは心を鍛えるからである。物理的な現象世界のなにもものも、これらの人間的な悲哀や苦痛を与えることはなく、人間が自らの内部に創造するこれらの意味ある感性によってこそ、生命は意義づけられる。だからこそ生を放棄する自殺も、優れて感性的であり、逆説的に、自殺は生き甲斐の故にこそ可能なのである。ギリシャ人は、生き甲斐を喪失した人間の自殺を許容した。アテナイでは、自殺はポリスに対する冒瀆であり犯罪とみなされたが、都市にたいして許可を求める限り、自殺は非道徳的なものとは考えられることはなく、そればかりか正当な行為として許可された。「もはやこれ以上生きながらえることを欲しないものは、その理由を評議会に申し出、許可をえたのち生からのがれよ。もしなんじが生がいとわしいものとなれば、死ぬがよい。もしなんじが運命に敗れたならば、毒をあおるがよい。もしなんじが苦悩にうちひしがれたなら、生を捨てるがよい。不幸になく者はその不運をのべよ。長官はかれに薬を与えよ。しからば苦悩は終わりをつけるであろう。」<sup>(30)</sup> ギリシャ人は生存の意志がいかに重要なものであるかを理解していたのである。

ギリシャ人が象徴的に表現したように、彼らにとっての創造的行為としての身体活動は、生存のための戦いのエトスに根ざしたものであつた。ギリシャ人は、健康のためではなく、ポリスのために身体を鍛えたのであり、ポリスのために生命を投げ打つたのである。彼らの内発的な戦いのエトスは、己の生存の根拠が社会（ポリス）とともにあることを強烈に意識する中に醸成されていた。この意味で、生き甲斐は、それをもたらす社会の構造的な理念を培

養し、支える原動力であり、これゆえにこそ、社会の発展は、豊かな感性を育む社会の健康に依存する。換言すれば、生き甲斐なくして個人は健康であることはできず、生き甲斐を再生産できない社会もまた発展することはない。

無意識の仮構という神話の記憶によって過去を現在につなぎ止めながら、自らを賦活しつづけた「ギリシャ人たちは、大部分の人が信じているよりも、もっと不幸であった。」<sup>(31)</sup> 換言すれば、古代のギリシャ人が私たちを魅了するのは、彼らが成し遂げた功績というよりは、彼らが堪え忍んだ種々の苦悩や困難に対する闘いの記録に由来している。ギリシャ人は、比類のない苦悩する能力を有し、その反応として人間のもつ全方位の潜在的な可能性を高度に開花させた。都市における共同体の強い連帯感と共感とを基盤に、政治的衝動といい、文化的衝動といい、すぐれた社会形成のダイナミズムを展開する一方で、人間が邪悪なる知的動物であることを垣間見せるかのように、残虐性を孕む人間の奈落も示現する。彼らのオリジナリティは、これまでの人々がなしえなかったことを発明し、発見したことにあるのではない。ギリシャ人は「むしろ他の民族のもとに生命を得ていたあらゆる文化を吸収同化したのである。他の民族が投げどめした地点からさらに先へ投げる術を棄えていたからこそ、ギリシャ人はあれほど遠くまで行ったのである。」<sup>(32)</sup> そのギリシャ人たちが、今日の私たちに眩しい閃光のように伝えてくるものは、彼らが開発したポリス社会の生命力を保障した生き甲斐の集積である。ポリスに自分の存在の根拠と命運と一体化させた戦いの中で、彼らは生命と等価の強靱な身体を日々創造しつづけた。血生臭い野蛮な暴力だけが正義の確証を与えた時代の中で、しかしなお人間にとって最善とは何であるかと問いつづけながら、最善を尽さんとたゆまず努力する不滅の行動原理を堅持した。

彼らの足跡からおよそ2,000年後のヨーロッパは、死の圧倒的な普遍性を刻印し、アテナイの没落とギリシャ精神の変質の魁ともなった疫病（黒死病）による社会の壊滅的な地獄絵の中から、「美と自由と高邁な努力の世界にとっての一つの典型として、都市や社会を形成する生命力であった」<sup>(33)</sup> ギリシャを思い出し、都市を再生することによって近代の扉を開くのである。

## 注釈

## 1.闘技（アゴン）文化と祭典の思想

- (1) J・ホイジンガ「ホモルーデンス」高橋秀夫訳, P.15, 中公文庫, 1973年
- (2) *ibid*, P.112
- (3) *ibid*, P.21
- (4) *ibid*, P.17
- (5) *ibid*, P.29
- (6) *ibid*, P.110
- (7) *ibid*, P.165
- (8) *ibid*, P.112
- (9) *ibid*, P.55
- (10) *ibid*, P.68
- (11) *ibid*, P.54
- (12) *ibid*, P.167
- (13) F・エアース「子供の誕生」杉山光信・杉山恵美子訳, P.70, みすず書房, 1985年
- (14) N・エアース/E・ダニング「スポーツと文明化—興奮の探求」大平章訳, P.150, 法政大学出版会
- (15) *ibid*, P.6
- (16) J・ホイジンガ, *ibid*, P.35
- (17) *ibid*, P.34
- (18) *ibid*, P.37
- (19) JJ・バツハオーフェン「母権論I」岡道男・河上倫逸監訳, P.19, みすず書房, 1991年
- (20) J・ホイジンガ, *ibid*, P.47
- (21) JJ・バツハオーフェン, *ibid*, P.23
- (22) N・ヤルウリス/O・シミチュク「古代オリンピック—その競技と文化」成田十次郎・水田徹訳, P.106, 講談社, 1981年
- (23) B・ノイチェ「ギリシャ芸術とスポーツ」杉勇訳, P.8, 養徳社, 1965年
- (24) J・スワドリング「古代オリンピック」穂積八洲雄訳, P.15, NHK出版, 1994年
- (25) 桜井万理子・橋場弦「古代オリンピック」P.80, 岩波新書, 2004年
- (26) F・メゾー「古代オリンピックの歴史」大島鎌吉訳, P.66, ベースボールマガジン社, 1973年:この「背信行為に対しては1兵ごとに2ミネ(Mine), 合計2,000ミネを支払わなければならなかった。」この金で, 当時のアテナイでは6,600頭の牛が買えた。
- (27) EN・ガーディナー「ギリシャの運動競技」岸野雄三訳,P.41, ほるぷ出版, 1982年
- (28) J・ホイジンガ「ホモルーデンス」P.41
- (29) N・エアース/E・ダニング「スポーツと文明化—興奮の探求」P.63
- (30) *ibid*, P.62
- (31) 桜井万理子・橋場弦, *ibid*, P.84
- (32) V・オリボバ「古代のスポーツとゲーム」阿倍生雄・高橋幸一訳, P.140, ベースボールマガジン社, 1986年
- (33) N・エアース/E・ダニング「スポーツと文明化—興奮の探求」大平章訳P.190
- (34) *ibid*, P.196
- (35) *ibid*, P.198
- (36) *ibid*, P.197
- (37) *ibid*, P.200

- (38) E・ダニング「問題としてスポーツ」大平章訳, P.126, りぶらりあ選書, 法政大学出版会, 2004年
- (39) ヘロドトス6-112
- (40) ヘロドトス6-116
- (41) 桜井万理子・橋場弦, *ibid*, P.150
- (42) *ibid*, P.153
- (43) J・ホイジンガ「ホモルーデンス」P.42
- (44) *ibid*, P.119
- (45) F・ニーチェ「ホメロスの技競べ」ニーチェ全集2, 西尾幹二訳, P.362, 白水社, 1992年
- (46) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第4巻, P.298
- (47) J・ホイジンガ, *ibid*, P.127
- (48) *ibid*, P.119
- (49) ホメロス「イリアス」*ibid*, P.266
- (50) クイントゥス「トロイア戦記」松田治訳, P.141
- (51) *ibid*, P.145
- (52) J・ホイジンガ, *ibid*, P.117
- (53) *ibid*, P.42
- (54) ヘロドトス 6-128
- (55) J・ホイジンガ, *ibid*, P.181
- (56) *ibid*, P.252
- (57) *ibid*, P.189
- (58) *ibid*, P.44
- (59) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第4巻, P.512
- (60) J・ホイジンガ, *ibid*, P.46
- (61) *ibid*, P.300
- (62) JG・フレイザー「金枝篇(三)」永橋卓介訳, P.27
- (63) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第一巻, P.113
- (64) VM・マンフレディ「アクロポリス—友に語るアテナイの歴史」草皆伸子訳, P.211, 白水社
- (65) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第四巻, P.121
- (66) G・マレー「ギリシャ宗教発展の五段階」藤田健治訳, P.205, 岩波文庫, 1977年
- (67) V・オリボバ「古代のスポーツとゲーム」阿倍生雄・高橋幸一訳, P.89
- (68) *ibid*, P.143
- (69) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第四巻, P.174
- (70) K・ケレーニ「神話と古代宗教」高橋英夫訳, P.19, ちくま学芸文庫, 筑摩書房, 2000年

## 2.ギリシャ精神における生

- (1) G・マレー「ギリシャ宗教発展の五段階」藤田健治訳, P.125, 岩波文庫, 1977年
- (2) E・デュルケム「社会分業論」田原音和訳, P.2, 青木書店, 1971年
- (3) アISKYロス「ギリシャ悲劇全集第一巻—ベルシャの人々」久保正章訳, P.145, 人文書院, 1979年
- (4) アISKYロス「ギリシャ悲劇全集第一巻—縛られたプロメテウス」久保正章訳, *ibid*, P.111およびP.116の断片のつなぎ
- (5) HDF・キトー, *ibid*, P.27
- (6) トウキディデス, *ibid*, P.68
- (7) FM・コンフォート「ソクラテス以前の哲学者たち」山田道夫訳, P.75, 岩波文庫, 1995年

- (8) CM・パウラ, *ibid*, P.45
- (9) HDF・キトー, *ibid*, P.346
- (10) ソフォクレス「ギリシャ悲劇全集第二巻ーアンティゴネー」呉茂一訳, P.142, 人文書院, 1979年
- (11) CM・パウラ, *ibid*, P.145
- (12) *ibid*, P.155
- (13) *ibid*, P.156
- (14) GS・カーク「ギリシャ神話の本質」辻村誠三・松田治・吉田敦彦訳, P.160, 叢書ユニベルシタス, 法政大学出版局, 1980年
- (15) G.マレー, *ibid*, P.107
- (16) トウキディデス, *ibid*, P.71 (2-51~2-53)
- (17) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第5巻, P.9
- (18) A・シュヴェーグラー「西洋哲学史」(上) 谷川徹三・村松一人訳, P.251, 岩波文庫, 2007年
- (19) *ibid*, P.265
- (20) *ibid*, P.262
- (21) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第4巻, P.522
- (22) A・シュヴェーグラー「西洋哲学史」(上), P.261
- (23) ER・ドッズ「ギリシャ人と非理性」岩田靖夫・水野一訳, P.289, みすず書房, 2005年
- (24) *ibid*, P.180
- (25) HR・ターナー「科学で読むイスラム文化」久保儀明訳, P.21, 青土社:「キリスト教やユダヤ教徒は、定額の租税を払うことができれば、イスラム教徒への改宗を強いられることはなかったし、おそるべき兵役の義務を課されることもなかった。」
- (26) G.マレー, *ibid*, P.175
- (27) F・ブローデル「日常性の構造2ー物質文明・経済・資本主義」村上光彦訳, P.210, みすず書房, 1985年
- (28) E・デュルケーム「自殺論」宮島喬訳, P.251, 中公文庫, 1985年
- (29) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第2巻, P.592
- (30) E・デュルケーム「自殺論」宮島喬訳, P.416
- (31) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第一巻, P.17 (Boeckhの引用文の孫引き)
- (32) F・ニーチェ「ギリシャ人の悲劇時代における哲学」ニーチェ全集2 西尾幹二訳, P.380, 白水社, 1992年
- (33) G.マレー, *ibid*, P.108